

平成 27 年度 普及に移す農業技術（第 1 回）

- [分類] 普及技術  
 [成果名] 水稲のイネドロオウムシ防除にパディート箱粒剤が有効である  
 [要約] 水稲のイネドロオウムシ防除にパディート箱粒剤を育苗箱 1 箱当たり 50 g の割合で移植当日に育苗箱の上から均一に散布する。  
 [担当] 農業試験場環境部、農業技術課  
 [部会] 病虫部会

1 背景・ねらい

イネドロオウムシは県内では中山間地の水田を中心に問題となっている害虫である。本害虫は、冷涼多湿環境を好み、梅雨期が長びくと出穂期近くまで発生が続き被害が拡大する。平成 20 年および 27 年に本種に対する防除試験を実施し、有効性が認められたので今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

- (1) 水稲のイネドロオウムシ防除にパディート箱粒剤を育苗箱 1 箱当たり 50 g の割合で移植当日に育苗箱の上から均一に散布する。

農薬登録内容

パディート箱粒剤

- [一般名および成分含有量] シアントラニリプロール 0.75% (IRAC コード<sup>注</sup>) : 28)  
 [毒性] 人畜毒性：毒物、劇物には該当しない [魚毒性] この登録に係る使用方法では該当がない  
 [対象作物に対する適用登録状況 (平成 27 年 9 月 30 日現在 JPP-NET 確認)]

作物名	適用害虫名	使用量	使用時期	使用回数	使用方法	シアントラニリプロールを含む農薬の総使用回数
稲 (箱育苗)	ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ イネドロオウムシ フタオビコヤガ コブノメイガ ニカメイチュウ イネツトムシ	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約 5 L) 1 箱当り 50g	は種時 (覆土前) ~ 移植当日	1 回	育苗箱の上から均一に散布する。	1 回
			は種前		育苗箱の床土又は覆土に均一に混和する。	
	移植当日		育苗箱の上から均一に散布する。			
	イネヒメハモグリバエ					

注) IRAC コードは IRAC (殺虫剤抵抗性対策委員会) による作用性機構分類で、同じコードは同一系統を表す。詳細は農薬工業会ホームページ (<http://jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>) を参照する。

3 利用上の留意点

- (1) 本剤はジアミド剤で、根からの吸収移行性を有し、経口、経皮活性ともに高い。対象害虫の筋肉に作用して収縮を引き起こすことで摂食は速やかに停止するが、殺虫効果の発現はやや遅効的である。  
 (2) 本剤は殺虫剤の単剤または殺菌剤との混合剤として市販されている。現在、商品として、単剤はパディート箱粒剤、混合剤はスタウトパディート箱粒剤、ツインパディート箱粒剤、ブイゲットパディート箱粒剤、ルーチンデュオ箱粒剤、ルーチンパンチ箱粒剤がある。

#### 4 対象範囲

県下の水稻栽培地域 約 33,000ha

#### 5 具体的データ

(1)平成 20 年に原村試験地の水田でイネドロオイムシに対する防除効果および薬害の有無を試験した結果、本剤の育苗箱 1 箱当たり 50 g 移植当日処理は、対照の Dr. オリゼプリンス粒剤と同等の高い効果が認められた。薬害は認められなかった（表 1）。

表 1 イネドロオイムシに対するパディート箱粒剤の効果（平成 20 年、農事試験場）

供試薬剤	処理方法	移植 22 日後（6 月 19 日）			移植 29 日後（6 月 26 日）		
		成虫	卵塊	幼虫+繭	成虫	卵塊	幼虫+繭
パディート箱粒剤	移植当日	0	0	0	0.7	0	0
	50g/箱						
Dr. オリゼプリンス粒剤	移植当日	0	0	0	0.3	0	0
	50g/箱						
無処理		1.0	1.3	1.0	0	5.3	19.3

供試薬剤	処理方法	移植 35 日後（7 月 2 日）			移植 42 日後（7 月 9 日）			薬害
		成虫	卵塊	幼虫+繭	成虫	卵塊	幼虫+繭	
パディート箱粒剤	移植当日	0	0	0	0	0	0	なし
	50g/箱							
Dr. オリゼプリンス粒剤	移植当日	0	0	0	0	0	0	なし
	50g/箱							
無処理		0	3.0	33.3	0.3	0	22.3	

表の数値は 60 株当たりの平均値

試験場所：諏訪郡原村 農事試験場原村試験地 発生状況：少発生

品種：「ゆめしなの」 播種：4 月 17 日 移植：5 月 28 日（中苗機械移植）

区制・面積：1 区 202 m<sup>2</sup> (28m×7.2m) 反復なし 1 区当たり 3 調査区を設け反復に代えた。

調査方法：移植 22 日、29 日、35 日および 42 日後に、調査区中央部の 60 株について成虫、卵塊、幼虫および繭数を計数した。薬害は適宜観察により調査した。

(2)平成 27 年に大町市八坂の水田でルーチンデュオ粒剤を用いて試験を実施した。対照のブイゲットフェルテラ粒剤と同等の高い効果が認められた。薬害は認められなかった（表 2）。

表2 イネドロオイムシに対するルーチンデュオ箱粒剤の効果（平成 27 年、北安曇農業改良普及センター、農業試験場）

供試薬剤	処理方法	移植 19 日後（5月 28 日）			移植 32 日後（6月 10 日）		
		成虫	卵塊	幼虫+繭	成虫	卵塊	幼虫+繭
ルーチンデュオ箱粒剤	移植当日 50g/箱	1.7	0	0	1.3	0.3	0
ブイゲットフェルテラ粒剤	移植当日 50g/箱	1.0	0	0	0.7	1.3	0
無処理		2.7	8.0	0	3.0	24.7	75.7

供試薬剤	処理方法	移植 32 日後（6月 10 日）	薬害
		食害度	
ルーチンデュオ箱粒剤	移植当日 50g/箱	0	なし
ブイゲットフェルテラ粒剤	移植当日 50g/箱	0	なし
無処理		24.9	

表の数値は 50 株当たりの平均値

試験場所：大町市八坂 発生状況：中発生

品種：「コシヒカリ」 移植：5月 9 日（中苗機械移植）

区制・面積：1 区 220～480 m<sup>2</sup> 反復なし 1 区当たり 3 調査区を設け反復に代えた。

調査方法：移植 19 日および 32 日後に、調査区中央部の 50 株について成虫、卵塊、幼虫および繭数を計数した。また、

移植 32 日後は食害程度を調査し、次式により食害度を求めた。薬害は適宜観察により調査した。

食害程度調査基準

A：食害葉割合が 51%以上、B：同 26～50%、C：同 1～25%、D：同 1%未満

食害度 = (3A + 2B + C) / (3 × 調査株数) × 100

試験にはルーチンデュオ箱粒剤（シアントラニリプロール 0.75%、イソチアニル 2.0%）を用いた。

## 6 特記事項

[公開]

制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

普通作物の新規農薬等の効果試験、平成 20 年度（2008 年度）、協力研究

普通作物の病害虫に関する素材開発研究、平成 27 年度（2015 年度）、素材開発